

大東不_一不_二長

(22)

「春」が生まわ
陽気地中に萌（きざ）し 東風（こち）が、東の間ではあつ
東風（こち）、氷を解くと たが、自然が織りなす見事
いう立春。
今年は、ことのほか寒波の居座りが長く、新聞紙上に「スキ一場だより」と、「梅だより」が隣り合わせの枠組に載せられている。
陽気が地上に昇り、雪氷解けて雨水となり、草木春陽に誘われて枝葉萌（も）える、と土御門（つちみかど）暦の伝える雨水の日、如月（きさらぎ）十九日に近く、積雪三尺を超える春の淡雪を見た。
飯盛の連山は白いペールに包まれ、さながら飯（い）いを盛りたるがごとしと、古人が、山容をたたえた様相を降りしきる白銀（しろ

がね）が、東の間ではあつたが、自然が織りなす見事な演出である。
昨冬以来、連續して東上する高気圧がもたらす晴天続き、日中は淡い陽光がふりそそぐ小春日和の日もあり、春日、遅々として進まずの冬至過ぎから、市内最東端の褐色と暗緑色に覆われていた山肌に「わかば色」が日を追って静かに広がり始めた。
アートフラワーの芯（しん）を思わせる山頂の木々も梢（こずえ）の息吹が高まり春の目覚めを告げ、やがて花が、葉が、小枝のすきまを満たしてゆく。季節の移り交わりとともに、美しく、あざやかに姿



き、市内で失われつつある
緑が豊かに思づいている。
そこに生きる小鳥や昆虫
の世界、子供のころ親しん
だ素朴な自然が目前に広が
る。

山の三月
東風吹いて

どこかで「春」が生まれてる。

今、市内の北新町で遺跡の発掘調査が急ピッチで進められている。現代、近

れなくなつた唱歌ふうの童謡
（百田宗治作詞）の
どこかで「春」が
生まれてる
どこかで水が
ながれ出す。

世 中世より古墳時代へと地表が地層ごとに「カキ取られ」てゆく。出土した遺物類についてはさておき、中世のころの水田に残された人と牛の足跡を見ると、なぜか「どこかで春が」の歌謡が脳裏をよぎる。ことに、「山の三月東風吹いて……」は、ここで農耕にいそしんだ先住者の春を待つ心に思いをはせる。

「ヒバリ」が啼くのどかな田園風景にかぶさり厳しい寒さの中に春をまつ農耕民の姿である。

文・今村安和